

中国海軍の空母作戦：中国空母は役に立つのか

漢和防務評論 20141201 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国の空母作戦について、漢和防務評論の記事を紹介します。漢和は、かつてのフォークランド紛争時の海戦を例にとり、米中の空母同士が対峙するような戦争になった場合、中国空母がとり得る唯一の行動は、港の中に退避するしかない、と述べています。その理由は、中国海軍の対潜能力が弱体で日米海軍の潜水艦攻撃に対処できないからと述べています。

中国が空母建造を決定する以前から、中国国内でも漢和と同様の主張をする人々がいましたが、国威発揚、ナショナリズムに引きずられ巨大な無駄な投資をすることになったのでしょう。中国空母は関連メディアにとって格好の題材であり、その点は、評価することはできましょう。

KDR 香港平可夫特電：

中国が空母の建造を開始した。現在第1段階にあるようだ。10年後には、少なくとも3艘の中国空母が出現する。即ち“遼寧”号、大連で建造中の空母（1艘）、及び上海江南で建造中の空母（1艘）である。この3艘の空母が出現した段階でも依然米軍は11艘の空母体制を維持している。中国にとって空母は、結局厄介者なのか、本当に役に立つのか？

KDR は、一国の海軍装備開発のあるべき姿について幾度も強調している。すなわち海軍装備開発は、その国の置かれた状況、仮想敵の状況によって異なり、定論というものではなく、他国と同じように評価することはできない、と。インドを例にとると、インドの敵はパキスタンのみであり、対潜能力が高くないパキスタンに対しては、2乃至3艘の空母から長距離攻撃を加える能力があれば十分である。もし仮想敵が米国や日本のように1位、2位を占める海軍大国であったならば、状況は完全に異なる。ソ連がなぜ空母開発を一步一步漸進させ、長年重点事業には指定しなかった理由がここにある。現在のロシアも同じである。ロシア海軍は、2025年までの海軍装備開発計画をすでに正式決定しているが、空母開発を優先させてはいない。ロシアは、弾道ミサイル核潜水艦（SSBN）を6艘建造し、核動力攻撃型潜水艦を少なくとも同じ数を建造する計画だ。このことからロシア海軍は依然として非対称優勢を重視していることが分かる。

米国空母艦隊は圧倒的な運用能力、技術的優勢を有しており、空母を以て空母を制する作戦は、米国が最も得意とする作戦である。すなわち空母技術も運用

経験も劣る空母保有国にとって、空母は、實際上重荷であり無用の長物である。かつてのフォークランド海戦を例にとると、この海戦は海戦史上、空母弱国と強国（英国）が直接対峙した唯一の現代海戦であった。当時英国は、ハーミーズ及びインビンシブル号の 2 艘の空母と攻撃機兼用の 20 機のシーハリアー戦闘機を出動させた。アルゼンチンが保有する空母は、” ベインティシンコ・デ・マジョ” 号が 1 艘で、排水量 15000 トン、A-4 攻撃機、エタンドール戦闘機を搭載していた。しかし海戦全体を通じて、アルゼンチン空母は、空母の特性である機動性、優れた空中攻撃力を発揮できず、逆にアルゼンチン海軍の重荷になった。それは何故か？

現代の海戦では、空母艦隊の最大の脅威は潜水艦であり、特に核動力攻撃型潜水艦である。英国海軍は、当時少なくとも 2 艘出動させ、そのうちの 1 艘が重型魚雷（しかも無誘導）を搭載し、巡洋艦” ヘネラル・ベルグラノー” 号を撃沈した。このことから核動力潜水艦の運用能力は英国海軍が圧倒的に優勢であり、アルゼンチン海軍は核動力潜水艦を保有せず、前者は非対称優勢を構成した。空母艦隊を保有するには、空母を防衛するための強力な対潜能力が不可欠となる。この方面で英国軍は圧倒的に優勢であった。

次に航空飽和攻撃能力である。特に現代の海戦においては、長距離空対艦ミサイルの大量使用による飽和攻撃が空母にとって致命的な脅威となる。米軍の JDAM 弾の射程はすでに 300 KM を超えている。

最後は運用経験である。上述の 2 つの重要技術は、空対艦ミサイル及び戦闘機の航続距離から見ると、アルゼンチンは遅れていたわけではなく、逆に” エタンドール” 戦闘機とエグゾゼ空対艦ミサイル（射程 40 km）は、英国装備よりも優れていた。アルゼンチンが、もしこの兵器と運用戦術に習熟していたならば、英軍空母はかなりの被害を受けたに違いない。

しかし英軍空母の運用経験は、アルゼンチン軍よりもはるかに勝っていた。アルゼンチン海軍にとって、空母” ベインティシンコ・デ・マジョ” 号は、お飾りに過ぎなかった。開戦初期、英軍の特混艦隊は、すでに空母” ベインティシンコ・デ・マジョ” 号搭載の A-4 攻撃機の攻撃圏内にいた。しかしレーダー探知能力、指揮能力が低く、むざむざ攻撃の機会を逃した可能性がある。アルゼンチン空母は、英軍空母艦隊に対し、一度も有効な攻撃を行っていない。フォークランド紛争の中期段階で、空母” ベインティシンコ・デ・マジョ” 号は、英軍核潜水艦を恐れ、巡洋艦” ヘネラル・ベルグラノー” 号の二の舞になるのを避けるため、退避の姿勢を採り、港内に逃れた。しかもその港は英軍攻撃機の空襲から防備するため、その他の防空部隊、戦闘機部隊の戦力を割くことになり、同空母は、アルゼンチン軍の大きな重荷となった。

米空母特混艦隊は、運用経験が 90 年以上あり、如何なる国家に比べても歴史は

長い。米軍空母と対等に戦おうとしても、卵で石を撃つようなものだ。この意味から言って「今後 20 年、中国の空母艦隊が本当に米国空母艦隊と対峙したならば、空母”遼寧”は、アルゼンチン空母”ベインティシンコ・デ・マジヨ”号の轍を踏むことになる」と KDR は評価している。

第一に、対潜能力である。如何にして空母を守るのか？全体的に見て、中国海軍の対潜能力は、たとえ今後 10 年、20 年建設を続けても、米軍や日本軍の相手にはならない。

第一大型対潜哨戒機の技術水準の差は、1 世代以上ある。しかも数量の差が巨大である。日本の海上自衛隊は 80 機近い P-3C を保有している。米海軍は、既に P-8 に進化している。日本も P-1 に更新しようとしている。現在、中国海軍の高新技術 6 号に指定された対潜哨戒機の数 は 2 機のみである。

空母自身の対潜能力はどうか？大量の対潜哨戒機が無ければ、空母の遠海への出動は自殺行為である。米海軍も言うに及ばず、1 艘の空母に少なくとも、対海捜索レーダー及び吊り下げ式ソナーを装備した 1 個中隊 5 乃至 8 機の S3B 型対潜哨戒機及び 5 乃至 8 機の SH-60F/R 型対潜ヘリを搭載している。

中国海軍について言えば、2014 年 7 月になってやっと、Z-18J 型早期警戒ヘリ及び Z-18F 型対潜哨戒機のテストを開始した。性能はどうか？写真を見ると、西側及び米国が保有している対潜、早期警戒機器は中国も全て保有しているようだ。Z-18J は、伸縮式の水陸監視レーダーを装備している。Z-18F は、潜水艦探知レーダーを装備している。しかしレーダーアンテナの直径が米軍の同種レーダーに比べ小さいので、探知距離は短い可能性がある。Z-18F は、30 個のソノブイ発射口を備えている。吊り下げ式ソナーも中国は保有しているはずである。ロシアが中国に輸出した KA-28 は吊り下げ式ソナーを装備していた。

上述の中国製対潜・早期警戒ヘリは、未だテスト段階にある。性能が満足できるものであるならば、何故ロシアから KA-28 や KA-31 を輸入したのであろうか？後者は、指揮用早期警戒ヘリである。したがって好意的に評価すれば、：中国海軍は、ロシア海軍の対潜、指揮早期警戒能力レベルの初歩段階に到達したとも思う。KA-28 及び KA-31 の対中輸出において、対潜作戦用データリンク技術は、ロシア海軍の高度の秘密事項であり、中国に輸出されてはいない。

サンクトペテルブルグの海軍装備展覧会において、本誌記者は、ロシア海軍が生産した吊り下げ式ソナーを見たが、相当重く、大型であり、特に探知距離を重視したようだ。しかし敏捷性はどうか？これらは各国海軍とも高度の機密なので分からない。ロシアの対潜作戦能力は、ソ連時代から NATO に比べ劣っていた。過去 20 年来、ロシア海軍の核潜水艦は、幾度も西側に発見され、ノルウェーのような小国でも、冷戦中はロシアの潜水艦を発見し追跡していた。中国海軍の 091 型核潜水艦は、幾度も日本及び米国によって発見されている。

しかしロシアや中国の対潜哨戒機が米軍核潜水艦を発見、追跡したとのニュースは未だ聞いたことがない。技術はどの程度か？推して知るべしだ。今年 8 月、ロシアは、米軍のバージニア級潜水艦を発見したと一方的に発表した、米側は否認している。

米海軍が装備する VIRGINIA、SEAWOLF、LOS ANGELES の 3 種類の核潜水艦は、総数が 18+3+40 艘である。中国海軍の核潜水艦の数はその端数しかない。したがって一旦開戦となれば、中国空母は、まず最初に潜水艦の圧倒的脅威に晒されることになる。次に日本海上自衛隊の通常動力潜水艦能力であるが、数は 16 艘と少ないが、技術は世界一流である。サイドスキャン・ソナー、曳航式ソナー、アクティブ・ソナー、パッシブ・ソナーなどなど何でも揃っている。西側の核潜水艦、通常型潜水艦は、みな射程の長いハーブーン対艦ミサイルを装備している。数量から見ても、技術水準から見ても、たとえ 30 年後であっても、依然として中国海軍は米海軍の対潜及び潜水艦戦力のレベルに到達することはできない。

空中において、30 年後、F-35C/B が更新時期に至ったとしても、中国海軍空母戦闘群は、ステルス性能、長距離打撃能力で米国海軍には勝てない。1 艘の米国空母を例にとると、たとえ現有の F-18F/E 艦載戦闘/攻撃機で計算しても、搭載機数は、1 艘の中国空母の搭載機（SU-33 のコピー版 J-15）数の倍である。米軍は、性能上、多種多彩な対艦ミサイルを保有し如何なる国家も及ばない。米軍は、将来、AGM-158（射程 370 KM）、AGM-154（射程 130 KM）、AGM-84（射程 270 KM）を含め、射程 370 乃至 1000 KM を超える LRASM 対艦ミサイルを配備するであろう。

圧倒的な米軍の空母及び艦載機の数優勢は、1 艘の中国空母に対する飽和攻撃が可能であることを意味している。1 分間に 100 発以上の発射速度は、現有の如何なるイージスシステムも対応できない。

戦争の間、”遼寧”号空母が唯一選択できる作戦は、アルゼンチン空母”ベインティシンコ・デ・マジョ”号と同様に、退避作戦である。この作戦には、”遼寧”が避難した港湾の対空、対潜防御のため余計な地対空火力と戦闘機が必要になる。中国空母は、重荷になるだけである。

以上